

里山ガーデンで最期まで生きる力を育む

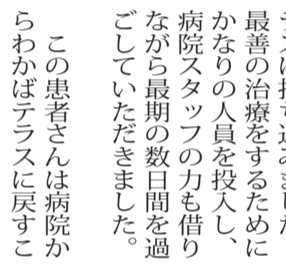
医療法人わかば会 俵町浜野病院 理事長 浜野 裕

わかば会のはじまりは1950年、父が佐世保市俵町に10床の耳鼻科医院を開設した時にさかのぼります。その後私が院長を引き継ぎ、2002年には救急告示病院となりました。2003年に拡張改築工事をした際に病棟機能に加え、5階をグループホームにして、2階にはリハビリ、デイケアを造りました。さらに病院裏にサ高住わかばレジデンスを開設し、閉院された近隣の産婦人科を、小規模多機能ホームにしました。そして2010年わかば会60周年記念事業として里山ガーデンのある有料老人ホームわかばテラスを造り、そこにデイサービス風祭りを併設し、さらに2012年には認知症対応型デイサービス里山療法クラブをオープンさせました。

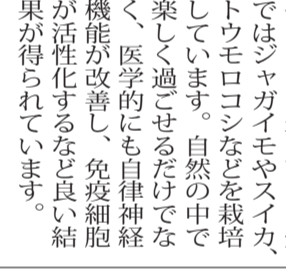
現在までの64年の病院の変遷の中で、父は96歳母は90歳で認知症で亡くなりました。まだ介護事業に本腰を入れる前でした。高齢者が直面している疾患だけでなく、その人が歩んできた人生や歴史をふまえてその方の問題を考えなければなりません。治療、介護の説明をすればいい人が多くいます。でも現役で活躍してあげると表情が明るくなり、今後の人生に正面から向き合い、リハビリなどに取り組む気持ちになります。テラス入居者でお茶の先生をなさっていた人には庭で野点の会をしていただき、踊りの先生には入所者の前で踊る限りの診療体制を整えています。私は若いころ大阪で循環器の3次救急病院にいましたし、救急専門の外科医もいるのでほとんどのケースに対応できます。どうしても手に負えない場合は、協力病院に搬送しています。我々が出来る範囲で救急医療を行ない、その後療養病棟に移る。それから帰宅する時にショートステイと在宅をつないでいこうとしています。わかば会は法人内に多くの施設があるので介護プランの変更などが迅速に行なえます。



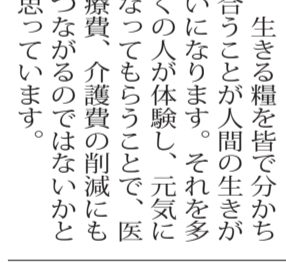
先日住宅型老人ホームわかばテラスで看取った方は、入居後食道癌が見つかった時にはすでに縦



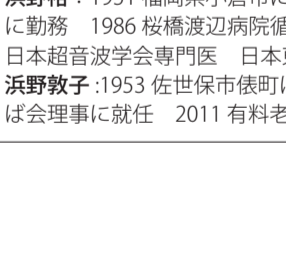
隔に転移。縦隔部の転移巣が広がり、気管が圧迫されて呼吸が困難となりました。その後、肺炎で呼吸不全がますます深刻になったので、病院に移して治療をしました。その間、転移巣が大きくなり完全に呼吸ができなくなり、人工呼吸器を付け肺炎の治療をしていましたが、余命は長くありません。



口から管を入れて人工呼吸器をつける際、患者さんが辛いので鎮静剤を投与します。患者さんの娘さんが来た時、いつも口が管が入った状態で眠っています。娘さんに「父はずっとこの状態なのでしようか」と言われ、対面してもらったために気管切開をしました。これでも口から入れた管を抜いて鎮静剤の投与をせずに済み、目を開けることができました。言葉は発せませんが、目で意思疎通ができるようになり、やがて筆談でコミュニケーションが取れるようにもなりました。しかしだんだんと病状が悪化した時、声にならない声で「テラスに帰りたい」と言うのが分かりました。テラスの入居者の名前を出して、その人に「会いたい」とも言いました。何とか帰してあげたいと思いましたが、ご家族も希望されなかったので、在宅酸素の機械を2台導入し、わかばテラスに持ち込みました。最善の治療をするためにかなりの人員を投入し、病院スタッフの力も借りながら最期の数日間を過ごしていただきました。



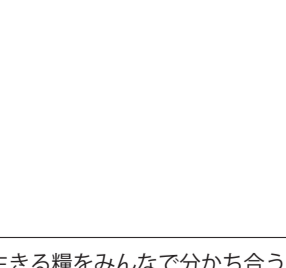
この患者さんは病院からわかばテラスに戻すことを告げた時に目の力が蘇りました。人生の最期を自分が好きな場所で迎えるのが人間にとって幸せなことだと改めて感じました。数年間、共に過ごした仲間が亡くなり、テラスで過ごすことができず、人生の最期を素晴らしい環境で過ごしていただけではないかと思っ



ています。娘さんにもとても喜んでいただけました。



団塊の世代が高齢者になった時を考えると、介護を支える仕組みとして私達が取り組んでいる里山療法についてお話しします。外に出て太陽の光を浴び風を感じる。それが生きる力につながるかと考え、デイケアに来た人たちに病院にある菜園で花や野菜を栽培してもらっています。収穫する時は皆さんともいっききしていただきます。デイケアの中にいる時より目に輝きがあり、動きもテキパキしています。これはいわゆる園芸療法です。この作業を美しい日本の風景、里山ガーデンの中で行う。それが里山療法です。



食べることは生きることです。食べ物育て、収穫し、調理して食べる。野菜を家庭を持って帰るとご家族も喜びます。それが生きがいにつながり、また来年も栽培したいと未来への希望がわきます。わかばテラス内に畑を作り、もち米を育て、畑ではジャガイモやスイカ、トウモロコシなどを栽培しています。自然の中で楽しく過ごせるだけでなく、医学的にも自律神経機能が改善し、免疫細胞が活性化するなど良い結果が得られています。

野山作りは天候に左右されます。ある年、トウモロコシが不作で、私は皆さんがっかりすると思っていました。が、がっかりするどころか「来年はがんばろう」と言っておられました。それまで土仕事などしたことない人がほとんどです。農作物を作ること人間のエネルギーの源ではないかと思えた経験でした。心の奥底にあるエネルギーをいかに引き出すかが、我々の仕事だと思います。里山ガーデンが小さな集落の役割をしているのかもしれない。

生きる糧をみんなで分かち合うことが人間の生きがいになります。(浜野 裕)

浜野裕: 1951 福岡県小倉市に生まれる 1979 久留米大学医学部卒業 大阪大学医学部付属病院第1内科(循環器科)入局 1980 同医局より桜橋渡辺病院(大阪市3次救急病院)循環器内科に勤務 1986 桜橋渡辺病院循環器内科医長 1988 俵町浜野病院 副院長 2001 俵町浜野病院院長 2002 医療法人わかば会理事長 【所属学会】日本循環器学会専門医 日本内科学会認定医 日本超音波学会専門医 日本東洋医学会専門医 日本心臓病学会 日本糖尿病学会 日本集中治療学会 日本老年病学会 日本認知症学会 日本認知症ケア学会 長崎県北臨床内科医会理事 浜野敦子: 1953 佐世保市俵町に生まれる 1979 久留米大学医学部卒業 関西医科大学第3内科入局 1983 俵町浜野野形外科・耳鼻咽喉科勤務 1987 俵町浜野病院内科勤務 2002 医療法人わかば会理事に就任 2011 有料老人ホームわかばテラス施設長に就任